

第 12 回「学ぶとは何か（二）」

『詩経』。

知識と知恵と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 12 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「学ぶとは何か」第二回のお話です。

前回お話ししましたのは、「学ぶ」とは、「知識」だけではなく、道徳的な内容を高めていく。

その二つを合わせるということでした。

『論語』を読まれて、「学ぶ」ということばが出てきたときは、そうご理解ください。

今日流に「知識」のみを得ることと誤解なさないように。

今日の学校でも、「学ぶ」というときは、「知識」だけではなくて、道徳的なこと、集団生活
 する上での行動等、そういったことも学びます。しかし、「知識」に力点を置いて、道徳的な
 ことをおろそかにするところがあります。

孔子の学校では、「知識性」「徳性」の両方を学びます。

具体的な文章を読んでいきましょう。

こうしいわ う 孔子曰く、生まれながらにして之を知る者は、これ し もの じょう 上なり。

まな これ し もの つぎ 学びて之を知る者は、次なり。くる これ まな もの またそ つぎ 困しみて之を学ぶ者は、又其の次なり。

くる まな たみ こ げ な 困しみて学ばざる、民 斯れ下と為す」（季氏第十六）

「学ぶ」ことが、「知識」の取得だけではないという理解で読むことが大事です。

「孔子曰く」わざわざ孔子とあります。普通はこう解釈します。

「子曰く」の「子」は男性に対する敬称です。特定の人を指すわけではありませんが、『論語』
 における「子」は孔子と理解して読みます。

しかし、ここで、わざわざ孔子とあるのは、ちょっと不自然です。

「孔子曰く」とあるのは、孔子からだいぶ離れた人のことばのようです。

「子曰く」のように、先生がこうおっしゃった、という近しい、親近感はありません。

「孔子曰く」というのは距離を感じます。そこで、これは孔子の直弟子というよりは、弟子の弟子、孫弟子、やや遠い関係の人が言ったのではないかと推測する人がいます。ある意味、正しいと思います。

我々でも「先生はこうおっしゃった」と「山田先生はこうおっしゃった」というのでは感じが違います。

ですから「孔子曰く」で始まる文章は、孔子から遠い弟子のことばなのでしょう。

それはともかく、ここでは非常に大事なことを述べています。

孔子は理想主義者でしたが、ふわふわした理想を追いかけるような人ではなく、非常に現実主義の人でした。

人間を見るときもシビアに観ます。夢みたいなことは言いません。

例えば、人間は誰でも能力があるんだ、誰でも何でもできるんだ、と言う人がいますが、それはふわふわした理想論ですね。

実際はそんなことはありません。現実にはやはりできない子もいる。様々な人がいます。

【孔子の現実主義】

孔子は、みんながみんな能力があるなんてことは、絶対に思っておりませんでした。それをはっきり言うわけです。では、そこからどうするかを具体的に考えようとしています。

儒教では、良くできる人、何でもすぐに良く覚える人、こういう人は教育する必要はないと言います。むしろ、あれこれやっても、なかなか覚えない人こそ、教育が必要であるというのが、儒教の基本的立場です。

儒教は、何か特定の人への教育と思われる方がいらっしゃいますが、それは違います。

前提として、人間をシビアに観るといふところがあるだけです。それがこの文です。

人間には能力に差があると言っています。

「生まれながらにして之を知る者は、上なり」

「之」とは「知識」と「道徳」です。「道徳」の方が強いかもしれませんが。それを知る人は確かにいます。ごくわずかですが。ランクが上だとしています。

そして、生まれながらではないが、「学びて之を知る者は、次なり」努力して、重要な知識や道徳を知る者は、その次のランク。努力を認めています。多くの方は、ここに希望が生まれます。

「困しみて之を学ぶ者は、又其の次なり」これが大半の人の在り方ですね。

私もそうです。数学が得意ではなかったので、うんざりしており、大変でした。数学の才能はまったくありません。しかし勉強しなければ卒業できませんから、なんとか低空飛行で勉強しました。

これが次の次の者。

その次は、「困しみて学ばざる」苦しくて苦しくて学ばない、逃げてしまう。これはいけません。

そして、なんと「民 斯れ下と為す」と続きます。民衆はそうだと言っています。

これは誤解されないように申します。

前回お話ししましたように、民というのは、はじめから農業、工業、商業の職を心得ています。

ですから、特別な知識は必要ない。その仕事に一生懸命従事することで十分ですから。

今、ここで言っているのは、他者の幸せのためにと志した者についてです。

誤解のないようにしてください。

次の文章です。

しいわ いにしえ まな もの おのれ ため いま まな もの ひと ため
「子曰く、古の学ぶ者は己の為にし、今の学ぶ者は人の為にす」（憲問第十四）

これは、よく誤解される文章です。

ですから、あえて挙げました。こう理解する人がいます。

昔の学ぶ者は、自分の得になるために学んだと、そう聞こえます。そうではありません。

これは、自己、自分を鍛えるために学ぶのだ、という意味です。

昔の学ぶ者は、自分に対して厳しく鍛えていく、そのために学ぼうとした。

ところが、今の学ぶ者はそうではない。人の為に学ぶ、他者のためにと聞こえますが、違います。

人からの称賛、評判、名声を求めするために学んでいるということです。

今日言うところの、人のためとは違って、人から「すごいな」と言われたい、そのために勉強しているのではないか、と非難していることばです。

解釈が全然違うので気を付けましょう。古い時代の文章を読むときの落とし穴です。

現代の感覚ですと、それは違った意味になるという危険性があります。

次の文章です。

「子曰く、詩を誦すること三百、之に授くるに政を以てして達せず、四方に使いして、専対すること能わざれば、多しと雖も、亦奚を以て為さんや、と」（子路第十三）

「詩を誦すること三百」。この「詩」は特定のものを指します。

『詩経』という古典です。『詩経』は必修のテキストで、必ず勉強します。これは古代の人々の詩、そういったものを集めた書籍です。

その中には、^{たと}喩えとか、当時の政治を風刺したものなどいろいろなものがあります。それを勉強したのでしょうか。

この「詩」を誦する、声に出して読んで勉強します。そして暗誦して、三百の詩を完全に覚えて、自由自在に言えるようになったとしましょう。

これは大したことですね。日本でも万葉集を千首も二千首も覚えている人がおりますが、詩を三百も覚えているのは大変です。

では、それで十分と思いますが、それではだめだと孔子は言っております。

「詩を誦すること三百」ということは、「知識」は十分だということです。

しかし孔子は、「之」その三百の詩を覚えている人に。「授くるに政を以てす」政治の在り方、為政者の在り方、官僚の在り方を教えたが、「達せず」うまくできない。現場に行って、全然だめだということです。

「四方に使いして」外交官として、よその国に使いに行く。今日と同じく、外交官には教養が必要です。自分の国を代表しているのですから、減多なことはできません。相手と向き合って対応できなければならない。

「専対する」一般的な話ではなく、向こうの国の要人とやりあうということです。

相手と議論をするときには、当時の習慣として、必ず古典を履んで議論をします。

古典を履むとは、話をするときに、必ず古典の^{かけことば}ことばを踏んだり、掛詞をうまく取り入れるということです。覚えている『詩経』の詩を自由自在に使って議論する、こうあってこそ、外交官としての役目を果たせるわけです。

「詩三百」、『詩経』を完全に覚えても、外交官として他国に行っても、その知識を生かして、相手国の要人とやりとりができないものがある。そんなものはだめだと言っています。

そして「多しと雖も、亦奚を以て為さんや、と」知識がいくらあっても、何をするのだ。全然役にたたないじゃないか、と。

これは心すべきことばだと思います。あれこれ知っている、知識は豊富にある。しかし、いざ現実の仕事にあたったときに、一つもそれを活用することができない人がおります。単なる知識、知っているだけです。

別のことばで言います。

【知識と知恵と】

「知識」を「知恵」として、生かすことができない。

「知識」は膨大でも、現実に活かす「知恵」として働かさせなければ、単に覚えているだけのことで、役に立たない。孔子はそれを言います。

知識、知識と貯め込むけれど、それを実際に使えて、活用してこそその「知識」だと、痛烈な皮肉を言うわけです。

実は、孔子の弟子で、数々こういう失敗をした人がいました。いわゆるお勉強はできるけれども、実際の仕事では何の役にも立たなかった、そういう人がいました。

我々は、たくさんの知識を得ますが、知識のための知識ではなく、「知識」を「知恵」として生かさなければならない。そういう目で「学ぶ」ということを見直してみてください。

今回は「学ぶとは何か」の第二回をお話ししました。